



続・続・大学の 奈良ガイド

第39講

近代と監獄 旧奈良監獄における 思想と実践

講師
水垣源太郎
(奈良女子大学教授)

明治期を代表する監獄建築「旧奈良監獄」。
放射状に広がる整然とした構造には、
人間の幸福への願いが込められていた。



筆者。広島県
鞆の浦 仙酔島
の渡船上にて

■最大多数の最大幸福 新しい監獄観の形成

明治5年の新制度とは、監獄制度に関する日本最初の包括的法令である「監獄則并図式」(明治5年)のことである。そこには次のように書かれている。「獄トハ何ゾ罪人ヲ禁鎖シテ之ヲ懲戒セシムル所以ナリ、獄ハ人ヲ仁愛スル所以ニシテ人ヲ残虐スル者ニ非ス人ヲ懲戒スル所以ニシテ人ヲ

■最大多数の最大幸福 新しい監獄観の形成

痛苦スル者ニ非ス、(中略)獄司欽テ此意ヲ体シ罪囚ヲ遇スヘシ」。要するに、獄において罪人を禁固懲戒するのはなぜなのか。それは残虐と痛苦を与えるのではなく、仁愛

をもって懲戒するためだというのである。

こうした獄制改良論は、当時すでに吉田松陰や山田方谷などによって主張されていた。しかし「監獄則并図式」を編

纂し、日本監獄制度の創設者と目される囚獄権正、小原重哉(図2)が主たる根拠としたのはイギリスの哲学者ジェレミー・ベンサム(図3)の学説であった。

ベンサムは、現代の諸制度に大きな影響を与えた「功利主義」哲学の唱道者である。彼によれば、正しい行為とは快楽や幸福を最大化する行為である。社会全体の幸福は個

人の幸福の総計なのだから、社会全体の幸福を最大化する政策をめざすべきだとする「最大多数個人の最大幸福」原則を主張した。社会の幸福を極大化するためには、犯罪

者や貧困層の幸福を増大することが重要である。そこで最小限の監視費用で犯罪者を更生する装置として、パノプティコン(一望監視装置)を考案している(図4)。

人の自律性を規律づける近代社会の端的表現だとしている。

びに篤志面接委員や教師といった地域社会の有志の支えがあつてはじめて成り立っていたのである。そう考えれば、奈良少年刑務所の近代的建築は、近代の理念を今に受け継いできた数多くの人々の努力を象徴するからこそ「近代化遺産」として貴重なのではないかとも思われるのである。



図1 旧奈良監獄空撮 (法務省ウェブサイト <http://www.moj.go.jp/content/001227219.jpg> より転載)

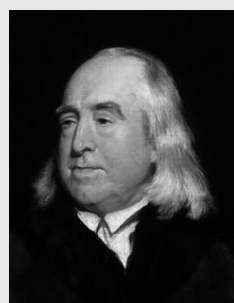


図3 ジェレミー・ベンサム
(Henry William Pickersgill,
©National Portrait Gallery,
London)



図2 小原重哉(『岡山市史』
第5巻より転載)

パノプティコンでは、監視者はいつでも囚人が見えるが監視者は囚人から見えないようになっている。いつ見られているかわからないという状況に置かれた人間はそのうち自分で自分をコントロールするようになる。フランスの哲学者ミシェル・フーコーは、このパノプティコンこそ、個

ともあれ結局日本では、パノプティコンのような大がかりな施設は建築されなかったが、日本最初の近代的監獄といわれる鍛冶橋監獄(明治7年(1874))をはじめ奈良少年刑務所も、監視の効率を考慮した放射状の様式で建築されている。しかし「監獄則并図式」に始まる近代の精神は、むしろ刑務職員、なら

(講師紹介)
水垣源太郎/
みずがき げんたろう
兵庫県生まれ。奈良女子
大学教授。専門は地域社
会学、組織社会学。
ひとこと：奈良は近代の
播種地でもあります。
その精神が現代の奈良に
いかに受け継がれている
かにも注目していきたい
と思っています。

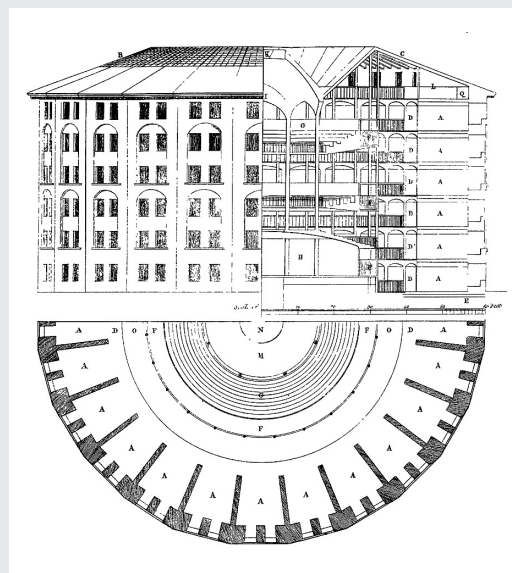


図4 ベンサムによるパノプティコンの構想図